

小学生の人間性・美意識向上に資する掃除教育の効果

後藤 匡胤

学生団体TEIGEN JP 掃除教育事業部マネージャー

Key Words 掃除教育, アクティブ・ラーニング

1.全体要約

本研究は1年間の留学を通じて日本特有の美しさが文化として根付いていることに気づいた高校生たちが外的要因によって損なわれる可能性のある美しさを守るために、株式会社ダスキンと連携し次世代の子供達に掃除の意義や文化的価値を伝えることを目的として学生団体TEIGEN JPが実施した掃除の出前授業の効果を検証するものである。事後アンケートを参加児童94名を対象に実施し、有効回答85名を分析対象とした結果、掃除の大切さへの理解度は96.5%、技能の習得実感は95.2%と高い肯定的な反応が得られた。これらの結果から、本実践は、児童が掃除を単なる作業ではなく、その意義や方法を伴う活動として理解するうえで一定の効果をもった可能性が示唆される。また、掃除の意義の説明と実演・実技体験を組み合わせた授業構成は、学校掃除の形骸化を見直し、掃除を文化的価値をもつ行為として捉え直すきっかけになりうることが示唆された。

2.研究の背景

日本の学校教育における清掃活動は、近年、忍耐力や協調性、自制心といった「非認知能力」を育む「特活(TOKKATSU)」の重要な要素として国際的に極めて高い注目を集めている。(国際協力機構, 2024) 掃除は単なる環境整備の場ではなく、児童が主体的に取り組むことで責任感や段取り力を養う「生きる力」の教育の場として位置づけられており、実際にエジプトなどの導入事例では、掃除の実践を通じて児童の主体性やモノへの愛着に劇的な変化が見られたことが報告されている。(国際協力機構, 2019) しかし、日本国内における掃除教育の現状にはいくつかの課題が散見される。実態調査によれば、学校の掃除を「好きなほう」と答える児童は18.7%に留まり、学年が上がるにつれて苦手意識が高まるとともに、教員の掃除への参加意識と児童の認識に乖離が生じるなどの形骸化が指摘されている。(株式会社ダスキン, 2011) また、掃除の「意義」を十分に理解し、用具の正しい使い方を習得することが児童の達成感や肯定的感情に繋がる一方で、学校での学びが家庭での具体的な掃除習慣として定着しにくいという「学校と家庭の連携」の難しさも明らかになっている。(藤原玲子、大竹美登利, 2012)

3.研究動機

筆者は、ニュージーランドおよびカナダでの留学経験を通じて、日本の街の美しさや清潔さが、一つの文化として社会に根づいていることを改めて認識した。一方で、近年はオーバーツーリズムやそれに伴うポイ捨てなどにより、日本の景観や清潔さが損なわれつつある現状もみられる。こうした状況に危機感を抱き、次世代を担う子どもたちに掃除の意義や文化的価値を伝えること

が必要であると考えた。そこで筆者は、人格形成にもつながる教育活動として、2025年に学生団体TEIGEN JP内に「掃除教育事業部」を創設した。

4.方法

本研究は、足立小学校5年生3クラスに在籍する児童計94名を対象に、2025年12月18日（木）に実施した。授業は1クラス45分のものを計3回行った。授業内容は、導入、掃除の意義の説明、用具の使い方の実演、実技体験、振り返りの流れで構成した。授業後には、児童および教員を対象に紙の無記名アンケートを配布した。児童には掃除の大切さの理解、掃除のやり方の理解、日本のきれいにする文化への意識などについて尋ね、教員には、授業後の児童の様子や意識の変化、本活動の教育的意義について回答を求めた。アンケートは後日回収し、児童94名分、教員3名分の回答を得た。分析には、児童の有効回答85名分および教員3名分の回答を用いた。

5.結果

本授業には足立小の5年生の3クラスの生徒計94名が参加し、担任教諭が傍聴した。授業開催後、参加児童94名を対象に事後アンケートを実施し、有効回答85名、担任教諭3名の回答を分析対象とした。

以下にその結果を記す。

図1 授業の様子(2025年12月18日、足立小)

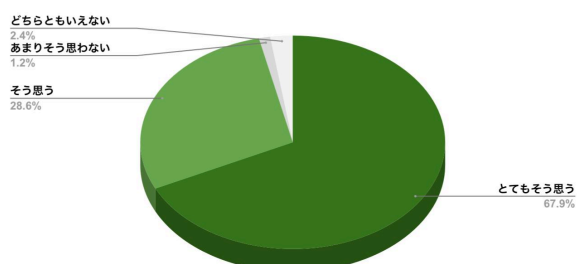


児童向けアンケートの有効回答85名分を分析した結果、以下のような傾向がみられた。児童向けの授業終了後アンケートでは、「掃除の大切さが理解できた」に対して、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定回答は96.5%であり、このうち「とてもそう思う」は67.9%であった。

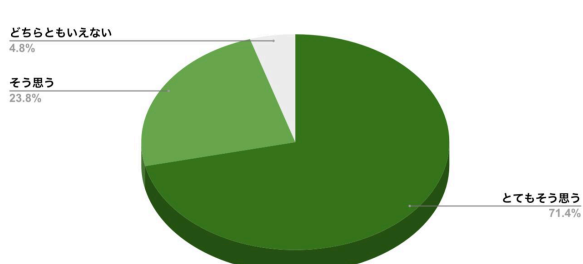
また、「授業前と比べて掃除のやり方が分かるようになった」に対する肯定回答は95.2%であり、「とてもそう思う」は71.4%であった。

さらに、「日本のきれいにする文化をこれからも大切にしたい」に対する肯定回答は96.4%であり、「とてもそう思う」は75.0%であった。

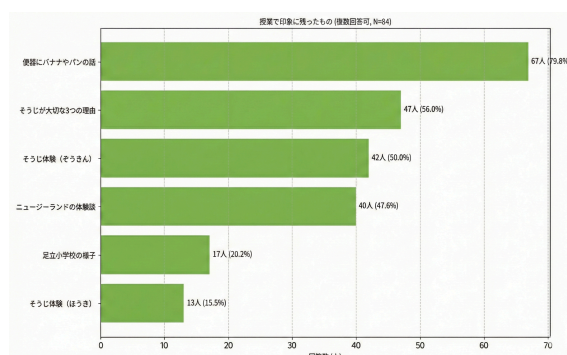
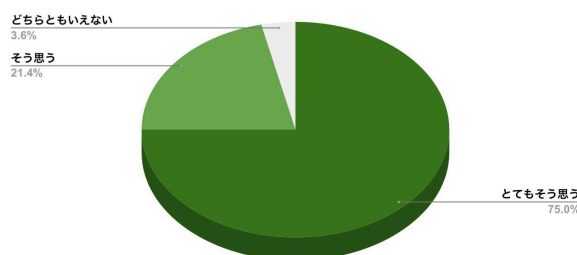
そうじの大切さ「快適・長持ち・守る」を理解できたか



授業前と比較し、掃除のやり方への理解が深まったか



日本の「きれいにする文化」をこれからも大切にしたいか



6. 考察

本実践を通じて得られた肯定的な結果から、本授業は、児童が掃除を単なる作業としてではなく、意義や方法を伴う活動として理解するうえで一定の効果をもった可能性があると考えられる。

第一に、掃除の意義に関する説明と、用具の使い方の実演・実技体験を組み合わせた授業構成が、児童の理解を高めた可能性がある。先行研究では、掃除の意義を理解することや、正しい用具の使い方を身につけることが、児童の達成感や肯定的感情につながる事が指摘されている。本実践でも、掃除の大切さへの理解と掃除のやり方の理解の双方で高い肯定回答が得られたことから、意義の説明と実技的要素をあわせて扱った構成は、児童が掃除を理解するうえで有効であった可能性がある。特に、掃除の必要性を考えさせる導入の後に具体的な方法を示したことは、児童にとって「なぜ掃除をするのか」と「どう掃除をするのか」を結びつけて理解する助けになったと考えられる。

第二に、本実践は、形骸化しやすい学校掃除を見直すきっかけになった可能性がある。背景で述べたように、日本の学校掃除は教育的意義をもつ一方で、児童の苦手意識や、掃除の意味が十分に理解されないまま日常的に行われているという課題が指摘されている。その点で、本実践

では、掃除を「やらなければならない作業」としてではなく、「次に使う人のための行動」や「日本のきれいにする文化を支える営み」として伝えたことに意義があると考えられる。「日本のきれいにする文化をこれからも大切にしたい」という項目において96.4%の肯定回答が得られたことは、児童が掃除をより広い文化的・社会的な文脈の中で捉えるきっかけを得たことを示している。

さらに、本授業では導入において、児童の関心を引きやすい具体的なエピソードを提示した。このような導入は、掃除を身近な問題として意識させ、その後の説明や体験への集中を高める役割を果たした可能性がある。実際に、授業で印象に残った内容として導入部分を挙げた児童が多かったことから、情報を伝えるだけでなく、児童が自分ごととして考えやすい入り口をつくることが、授業全体の理解を支える要素の一つであったと考えられる。

7. 成果と今後の課題

本研究においては以下のような成果を挙げられた。

(1) 児童の理解・意識の面での成果

児童の事後アンケートの結果では掃除の大切さ・掃除のやり方・日本のきれいにする文化への意識理解が高かった

これらのことから、掃除を単なる作業ではなく、意味のある活動として捉えるきっかけになった可能性がある

(2) 授業方法・教育モデルとしての成果

本実践では、身近な具体例を絡めた掃除の意義の説明に加え、用具の使い方の実演や実技体験を取り入れた授業を行った。

その結果、掃除のやり方に関する理解についても高い肯定回答が得られた。このことから、意義の説明と実技的な学びを組み合わせた構成は、児童の理解を深めるうえで有効であった可能性がある。

一方で 以下のような課題もある。

(1) 効果の持続性

今回の研究を通じて確認できたのは、授業実施直後の理解や意識である。そのため、こうした変化が日常の掃除行動や家庭での習慣にまでつながったかどうかは明らかではない。今後は、一定期間をおいた追跡的な調査が必要である。

(2) 測定可能な範囲

本研究では、掃除に対する理解や意識を中心に測定しており、忍耐力や協調性、自制心といった非認知能力そのものを直接測定したわけではない。また、対象は1校の5年生に限られているため、結果を一般化するには慎重である必要がある。今後は、対象校や調査方法を広げながら、継続的に検証していく必要がある。

8. 謝辞

本研究を進めるにあたって支えてくださった方々に感謝を申し上げます。

はじめに学生団体掃除教育事業部のメンバーとして事業を共創し、現場に立って児童への直接的な指導にあたった堀井爽夏、野村莉音、星萌香、依田桃果の各氏に感謝の意を表する。本事業の実施にあたり、的確な助言を賜った香山奈帆子様をはじめとする株式会社ダスキンドスキンの掃除教育研究所の方々には改めて厚くお礼申し上げます。

また、このような授業を実施する場を提供し、実施に向けた調整に尽力いただいた鈴木厚史先生をはじめとする足立小小学5年教職員方々、ならび授業に溢れんばかりの熱意を持って参加し学びを共有してくれた5年生の児童たちに心から感謝する。

さらに、本研究の指導をいただいた先生方、および日々の活動を温かく見守り支えてくれた家族と友人に、深い謝意を表する。

本研究は、これら多くの方々の継続的な支援によって成立したものである。ここに記して、感謝の意

参考文献

- 大竹美登利、藤原玲子. (2010). 指導計画を作成して取り組む学校掃除で育成される力とその課題. 日本家政学会誌.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/kasei/62/0/62_0_137/_article/-char/ja/
- 株式会社ダスキン. (2011). 児童・生徒からみた学校掃除に関する実態調査.
https://www.duskin.co.jp/torikumi/gakko/research/pdf/research2011_01.pdf
- 藤原玲子、大竹美登利. (2012). 学校の掃除教育で育成される力: 家庭での取組みに与える影響.
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1390001205561011328>
- 藤原玲子、大竹美登利. (2013). 目標を明示した掃除教育で身に付く力.
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1390282680537981568>
- 国際協力機構(JICA). (2019). 協調性を育む日本式(協調性×小学校)エジプト. 広報誌『mundi』.
https://www.jica.go.jp/information/publication/magazine/mundi/1904/201904_03_01.html
- 株式会社ダスキン. (2019). 児童・生徒からみた学校掃除に関する実態調査.
https://www.duskin.co.jp/torikumi/gakko/research/pdf/research2019_01.pdf
- 国際協力機構(JICA). (2024). 「掃除の時間」に世界が注目？非認知能力と特活. JICAトピックス.
https://www.jica.go.jp/information/topics/2024/p20241224_01.html
- 学生団体 TEIGEN JP. (2025). 「地域をまもれ！おそうじ隊」概要資料